

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520571

研究課題名(和文)平安鎌倉時代における仏教漢文書記史の研究

研究課題名(英文)A Study of the Writing of Buddhist text in Heian and Kamakura Period.

研究代表者

磯貝 淳一 (Junichi, Isogai)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：40390257

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：平安時代から鎌倉時代にかけて仏家によって撰述された漢文資料の原本調査を実施した。対象としたのは清暹撰『顕密差別問答』、覚鑿撰『心月輪秘積』、『密厳浄土略観』および『法勝寺御八講問答記』である。翻字本文にもとづく電子テキストを作成し、注釈関係文献については漢字の情報付きデータベース構築の基礎的段階を終了した。また、「注釈活動を中心とした教義理解」と「法会における言説の記録」という異なる言語活動の所産について、そこに認められる言語事象の記述を行った。このことを通じて、当該期の仏家の漢字文に共通する用字・用語・文章構造の実態を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：I have investigated the following materials of Buddhist text in Heian and Kamakura period.

1, Kenmitsu-sabetsu-mondo(owned by Kozanji temple) 2, Shin-gachirin-hi-shaku(owned by Kozanji temple) 3, Mits u-gon-jodo-ryaku-kan(owned by Kozanji temple) 4, Hossho-ji-mihakko-mondo-ki(owned by Todaijitotosyokan) And I made electronic texts and databases. This study clarified the materials of Buddhist text have common base in writing system and style.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語史 書記史 仏教漢文 和化漢文 変体漢文 用字法

1. 研究開始当初の背景

僧侶が言語生活の痕跡を残したところの仏教漢文は、平安時代の日本語の様相を明らかにするために有力な資料として訓点資料の研究に利用され、公家の言語とは位相を異にする僧侶の言語の実態、仏家内部の宗派・法統による言語の異なりや関わり等が明らかにされてきた。近年、『訓点語彙集成』(築島裕、全8巻・別巻1、汲古書院、2007~2009)が刊行されたことにより、一次資料を手にとることが難しい研究者にとっても、仏書の訓読に伴う僧侶の言語は、十分に研究可能な分野として、その意義を新たにしつつある。しかし、そこで中心とされるのは「漢文理解」の言語としての漢文訓読語の有り様であって、日本語の「書記行為」の所産としての仏教漢文の研究は、明らかにすべき余地を多く残していると言えよう。また、日本漢文研究では、「和化」の特徴を明確に有する歴史書や古記録類、また仏教学、日本文学等によって資料的価値が認められてきた伝記・説話・表白・願文類を対象として多く行われてきた。そこには対象資料の偏りが存しており、その多くが俗家の手になる文章を対象として進められてきたと言える。近年、仏教漢詩文を日本漢文資料に位置づける中で、仏家側の文章の解明が大きく進められ(山本真吾『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』、汲古書院、2006)、法談の聞書類による研究も進展を見せつつある(土井光祐『鎌倉時代法談聞書類の国語学的研究』影印篇(一)(二)、汲古書院、2010)。しかし、漢字文に限っても、僧侶の言語生活/書記生活に伴って生成された文章は、なお様々なジャンルに涉っているのであって、各地寺院に残されたそれら文章の種類・量も膨大な数に上る。現在公開され、研究に供される資料だけでは、仏家の日本語書記の有り様の全容を、日本語文章史に位置づけることはできない。本研究において調査の対象に含む仏家の記録文たる仏教記録類(次第・作法・用意・覚悟・日記等)は、僧侶の日常的な文章生活に密着したものであると認められつつも、仏教の教義に直接関わるテキスト(経典・注釈書等)とはレベルの異なるものとして一括され、その語学的な意味合いを体系的に捉えようとする研究は行われていない。本研究では、仏教漢文の文章研究の中心的対象となってきた資料群の他、これまでは研究対象とはなり難かった、仏家の記録文たるこれら仏教記録類の文章データを積極的に収集することとする。

2. 研究の目的

本研究は、日本撰述の仏教漢文の発掘・翻字データの作成を行い、当該ジャンル資料の日本語書記史における位置づけを探ろうとするものである。特に、これまで日本語学の研究対象とされることの少なかった仏家の

記録文たる仏教記録類を仏家の書記活動の一つに位置づけ、仏教漢文の範疇化・ジャンル相互の文体特徴の比較を行う。

3. 研究の方法

まずは、僧侶による文章作成活動が盛んになる平安時代後期に活躍した真言宗の学僧、濟暹(1025-1115)及び覚鑿(1095-1143)の撰述資料について、京都・高山寺において原本調査を行い、各資料における漢字使用の実態を記述する。特に両者の撰述にかかる注釈書類の用字・用語について、その使用の実態を明らかにするために、以下の手順で研究を進める。

古写本に基づく電子テキストデータの作成(翻字本文・訓読文の整備)

漢字データベース作成(電子データへの文字情報の付加)

指標的漢字の抽出・用字法の実態把握

対象とするのは、濟暹撰『顕密差別問答』(建久六年写2帖)、覚鑿撰『心月輪秘釈』(院政期写1巻、久安五年写1帖)、密厳浄土略観』(治承五年写1冊、応保二年写1帖)である。

続いて、注釈活動による教義理解の文章ジャンルの周辺にある資料群についての調査を行う。対象とするのは、東大寺の学僧、宗性(1202-1278)が書写した論義関係の資料群である。宗性書写にかかる資料は数多く存するが、まずは論義法会の記録であり東大寺図書館の所蔵の『法勝寺御八講問答記』を取り上げる。本資料は、天承元(1131)年から文永十一(1274)年に至る論義の記録の筆写である。書誌調査・翻字本文の作成から電子データ化の作業を順次進めつつ、用字・用語の実態調査を行う。

4. 研究成果

対象とした仏教漢文資料のうち、注釈関係の典籍として、濟暹、覚鑿の撰述にかかる古写本の原本調査を京都・高山寺において継続的に実施した。また、東大寺図書館所蔵の『法勝寺御八講問答記』については、東京大学史料編纂所所蔵の写真帳による調査を行った。濟暹撰『顕密差別問答』、覚鑿撰『心月輪秘釈』、『密厳浄土略観』についてはデータベース構築の基礎的段階を終了している。

本研究では、当該期の仏教漢文を「注釈活動を中心とした教義理解」「法会における言説の記録」に大きく二分して、僧侶の言語生活の異なる場面において生成された文章の比較を試みた。その結果、注釈書類の一部と論義法会の記録においては、両者ともに問答体が文章構成の核となっており、そこに使用される助字とともに仏家特有の文字使用が認められた。

例えば、疑問助字「耶」の使用が挙げられる。当該期の注釈書・説話・古往来・靈驗記・

往生伝・表白文・書状・古記録等のジャンルにわたって和化漢文資料を調査すると、説明要求・判定要求・選択要求・反語・疑惑の疑問表現では、「乎」「哉」「耶」「歟」など種々の助字が文末に使用されている。その中において、「耶」字は、俗家の手になる文章には殆ど使用が認められず、仏家撰述の注釈書類を中心として説話や靈驗記、往来物などに認められる仏家の資料との関わりの強いものであることがわかる。

また、これらの文体特徴は、仏教の教義理解に直接に関わって生み出される文章群の周辺に位置する諸文献にも影響を与えている可能性があることがわかった。先に掲げた「問答体」は、注釈的な文章において選択されることの多い形式である。この問答体による文章展開は、様々なジャンルの文章に認められるものであるが、文章作成者の社会的属性や、その言語活動の実態を捉えたときに、資料の新たな位置づけを行う上での指標となるものであることがわかる。たとえば、文章内容・類型から「明衡往来型の古往来の文章ジャンルに分類される『東山往来』(高野山大学図書館蔵、応永十一年写)は、清水寺の僧、定深の撰述にかかる消息文範集である。その文章は、一般に認められる古往来とは異なり、日付や宛所等の書簡文の体裁を省略する一方、往復双状が1セットの問答体の文章の体をなしている。この問答体を用いた文章展開に加えて、先に見た仏家特有の助字使用が存している。しかも、その仏家特有の助字の使用は、往復の文章作成者の仏俗の別を越えて現れる。つまり、往状(檀那・俗家)/返状(師僧・仏家)であるところの往状に、仏家特有の用字が混入しているのである。書写者の書写態度を考慮に入れる必要があるものの、このことは、本資料が単純な往復双状の寄せ集めではなく、一定の編纂意図のもとに作成され、書記の実態としては、古往来よりもむしろ僧侶の言語生活を反映した「注釈書」「論義の記録」に類似する性格が認められることがわかるのである。この意味において『東山往来』の文章は、書簡文体の形をとりつつも、内実は注釈文体であって、百科的知識・書簡文の書き方を示す手本であると同時に、論理的な構造・問いの立て方・論証の仕方の手本ともなっている可能性が指摘できる。

以上の点に加えて、東大寺宗性写『法勝寺御八講問答記』の調査研究から、当該資料が日本漢文研究における資料的な欠落を埋める可能性のあるものであることを指摘した。これまでの日本漢文(和化漢文/変体漢文)研究では、和化の事象が明確に認められ、記録体として特有語彙を持つなどジャンルを形成している古記録の研究が中心に進められてきた。日本漢文を広く視野に入れ、様々な位相性から文章/文体の問題を探ろうとすれば、俗家が主な担い手となる古記録と比較しうる「実用的」な文章が仏家の側に

も必要であると考えられる。しかし、平安・鎌倉時代には僧侶の手になる古記録はごく少ない。文章生成の場や目的は異なるものの、学問的な教義理解のための文章とは別の、記録的/実用的色彩の濃い文章として、『法勝寺御八講問答記』の言語の実態を解明する意味は大きいと考える。

以上の視点に立ち、当該資料の一部(巻第一・天承元年から久安六年分)を対象として用字・用語・文章構造の検討を行った。本資料は、論義の進め方に則り、「問」「答」「進云」「付之」「答」の二問二答を原則とする記録である。その特徴として以下の点を指摘した。

古記録類との近さ

判定要求の疑問表現において、「歟」字が多用されること、また疑問詞疑問文において助字の使用率が十割近くにのぼることが古記録の特徴と重なりを見せる。

仏家撰述の和化漢文との近さ

疑問表現における助字に「耶」を多用する。以上の点のみから当該資料の性格を述べることは避けなければならない、今後さらなる検討を続ける必要はあるものの、これらの資料を日本漢文研究に導入することによって、俗家の古記録中心に進められてきた「実用」文の文体研究および「実用」の内実の問い直しが進む可能性がある。

仏家の学問的な活動の場において用いられた文章の「型」の広がりの実態解明とその言語生活上の意味の解明に向け、様々な言語事象の整理に基づいて調査を行い、仏家の漢字文の範疇化を進めることが今後の研究課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

磯貝 淳一、『後二條師通記』本記・別記の文体差について 接続表現からみた文章構造の比較 (研究発表要旨) ことばとくらし、査読無、25号、2013、p.55

磯貝 淳一、醍醐寺蔵『探要法花験記』日本・中国両部の比較 和化漢文用字法の共通基盤解明に向けて、国文学攷、査読有、215号、2012、pp.21-32、

磯貝 淳一、「書けない」をどう書いてきたか 「日本語書記史」から教科書教材を見る、国語科教育、査読無(パネルディスカッション提案内容掲載) 71集、2012、pp.9-10、

〔学会発表〕(計4件)

磯貝 淳一、「書き方」はどのように学ばれてきたのか 教科書としての往来物の編纂と文体の問題、新潟県ことばの会、2013年11月23日

磯貝 淳一、疑問表現からみた和化漢文の文体 仏家「記録文」の位置づけをめぐって、訓点語学会、2013年10月20日、東京大学

磯貝 淳一、注釈文体の系譜—古往来における『東山往来』の位置づけを中心に—、新潟大学言語研究会、2013年5月13日、新潟大学

磯貝 淳一、和化漢文用字法に見る「問い」と「疑い」 古記録における判定要求の一用法の検討から、新潟大学教育学部国語国文学会、2012年2月4日、新潟大学

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

磯貝 淳一 (ISOGAI, Junichi)
新潟大学・人文・教育社会科学系・准教授
研究者番号：40390257

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：